



ちょっと素敵な話
No.5

彼が伝えたかったこと

私が一年目に担当させていただいた利用者さんの話です。

福祉系の大学は卒業しましたが、異職種あがり現場を全く知らない私が担当した七名の利用者さん、その中に言葉ではないですが、想いを伝えにくくさる方がいらつしやいました。

その方法は、ジェスチャーだったり、ボードに文字を書いたり、時には私の手をボードにして、文字を書いたりでした。

内容は様々です。

「電車の模型を見に行った、遊んだ話」

「飛行機で旅行に行った話」

「昔は陸上をしていて、とても足が速かった話」

「家族の話」

しかし私は、そのすべてを理解できた訳ではありませんでした。でも、一年目で何をするにも必死だった私は、彼のすべてを聞き取ろうと努力しました。

そんな努力が実を結んでか、彼はよく私に想いを伝えようとしてくださいました。

二年目以降、彼の担当から外れてしまいました。でも、それでも私によく関わってくださいました。でも、その時の担当していた利用者さんの対応で手が離せないときなど、彼と十分に時間が取れないことがありました。「続きは、〇〇さん（彼の当時の担当者）に言ってください。」と言ってしまったこともありました。

彼が亡くなったのは、私が四年目の時でした。

私は、どれだけ彼の想いを受け取れたのだろうか。

彼は私とのかかわりの中で、どれだけ満足できたのだろうか。

うまくくみ取れない私に、イライラしていたんじゃないだろうか。

様々な思いが私の頭の中を駆け巡りました。

そして、同時にとても悔しかったです。

そこから私は、利用者さんの想い・意思をできるだけ汲み取りたいと思うようになりました。

特に発語のない方には、絵や写真・カード、筆談、実際の場所：など様々な方法を使って、一人ひとりの想いを汲み取る努力をしました。

意志を汲み取ることが難しい思うことはあります。でも、私の“知りたい”という思いは必ず伝わっていると思っています。

ほんの少しでも、生きづらさを助ける力になれるこの仕事に、私は誇りと自信を持っています。そして明日からも、大好きな利用者さんと関わっていききたいと思いません。

